

防人検校時の家持歌

著者	阿部 りか
雑誌名	日本語と日本文学
巻	17
ページ	14-24
発行年	1992-09-30
URL	http://doi.org/10.15068/00161934

防人檢校時の家持歌

阿 部 り か

一

万葉集卷二十には、天平勝宝七歲防人交替のために筑紫に派遣された諸国防人等の歌八十四首が収録されている。この前年天平勝宝六年に、大伴家持は兵部少輔となり〔続日本紀〕同年四月五日条)、難波での防人檢校の任に當った。天平勝宝七歲の防人歌はその時、家持の裁量によつて蒐集されたと思われる。

今、その全体を掲げると以下になる。なお、表中のロ―マ数字ⅠⅡⅢⅣⅤは、防人歌中の家持の独詠歌であることを示す。

天平勝宝七歲乙未の二月に、相替りて筑紫に遣はさゆる

諸国の防人等が歌

四三二一―四三二七

二月六日

遠江国

四三二八―四三三〇

七日

相模国

Ⅰ四三三一―四三三三

八日

〈追ひて防人が悲別の心を痛みて作る歌一首〉

Ⅰ四三三四―四三三六

右九日

四三三七―四三四六

七日(九日進)

四三四七―四三五九

九日

Ⅱ四三六〇―四三六二

十三日

〈私かなる拙懷を陳ぶる歌一首〉

四三六三―四三七二

十四日

四三七三―四三八三

同

四三八四―四三九四

十六日

Ⅲ四三九五

十七日

〈独り龍田山の桜花を惜しむ歌一首〉

四三九六

同

〈独り江水に浮び漂ふ^{こづみ}葉を見、貝玉の依らぬことを怨恨^{うらみ}みて作る歌一首〉

四三九七

同

〈館の門に在りて江南の美女を見て作る歌一首〉

Ⅳ四三九八―四四〇〇

右十九日

〈防人が情と^な爲りて思ひを陳べて作る歌一首〉

四四〇一～四四〇三	二十二日	信濃国
四四〇四～四四〇七	二十三日	上野国
V 四四〇八～四四一二	二十三日	

〈防人が悲別の情を陳ぶる歌一首〉

四四一三～四四二四	二十九日	武蔵国
-----------	------	-----

四四二五～四四三二 (昔年防人歌)

最初に見られる遠江の防人歌の前には、諸国防人歌全体の総題とも言ふべき、「天平勝宝七歳乙未の二月に相替りて筑紫に遣はさゆる諸国防人等が歌」の一文がある。ところが右に示すように、諸国防人等の歌は日付順に記されている。また、その歌を入手する合間に詠まれた家持の長歌四首と短歌三首も日付に従う。してみると、全体を諸国防人等の歌でまとめる形を取りながら、間に家持自身の歌を併録する在り方には、些かの疑問を抱かせられる。

この点について、早く久米常民氏（『万葉『防人歌』について——大伴家持の『防人歌』収録とその作品——』『万葉集の文学論的研究』第二章第二節）は、妻の坂上大嬢、あるいはその母坂上郎女と離れて生活した越中赴任の経験が、家人と別れる防人への共感を容易にさせていると説かれる。また吉井巖・山本セツ子両氏（『家持と防人たちとの出会い』『萬葉集への視角』所収）によれば、大伴家一族の安泰を守るために境界で奔走したことが、家持の「孤愁とみじめさ」という鬱屈した想いを形成し、防人等が感ずる孤独な心情への共感を可能にしたという。

さらに、防人歌に触発されて作られた家持の長歌Ⅰと、続く

短歌Ⅰ、長歌Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ（表中記号）には、防人歌と等質な主題が認められ、その結果伊藤博氏は、「防人歌群」（『萬葉集の歌群と配列下』第七章第五節）において、従来触れられずにきた長歌Ⅱと短歌Ⅲにも、同様に望郷の想いが詠み込まれていることを具体的に論ぜられている。

前掲の表から知られるように、家持の長歌Ⅱが詠まれた四日後、二月十七日には短歌Ⅲが、その二日後には長歌Ⅳが作られる。その長歌Ⅱ（四三六〇～四三六二）は、上総国の防人歌（四三七七～四三九九）と常陸国の防人歌（四三六三～四三七二）の間にあり、それぞれが日付順に交互に配されている。ここから、諸説が述べるように、先に詠まれた防人歌によって家持自身の望郷の想いが触発され、歌が詠み継がれていく様子が知られる。

ところが、短歌Ⅲと長歌Ⅳではこの形が崩れ、短歌Ⅲは二月十七日、続く長歌Ⅳは十九日と、僅か一日を隔てるだけの形をとる。防人歌中の家持歌が、その前の防人歌に触発される形で展開していると考える限り、家持が防人歌に触発されて詠む短歌Ⅲと長歌Ⅳとの関係には、他と異なる意図が存していると推測されよう。

防人歌中にある家持歌の作歌意図を考えるためには、短歌Ⅲ、長歌Ⅳ自体の内容に目を配る必要がある。それゆえ、ここでは短歌Ⅲと長歌Ⅳ両者の関係を明らかにすることによって、二組の歌が天平勝宝七歳の防人歌に見られる他の家持歌の中で、どのように位置付けられるかを考えてみたい。

二

防人検校が行なわれている難波で詠まれた短歌Ⅲは以下に示す通りである。

Ⅲ 独り龍田山の桜花を惜しむ歌一首

(1) 龍田山見つつ越え来し桜花散りか過ぎなむ我が帰るとに

(巻二十・四三九五)

独り江水に浮び漂ふ糞を見、貝玉の依らぬことを怨恨
みて作る歌一首

(2) 堀江より朝潮満ちに寄る木屑貝にありせばつとにせまし
を

(同・四三九六)

館の門に在りて江南の美女を見て作る歌一首

(3) 見たせば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき

誰が妻

(同・四三九七)

右の三首は、二月の十七日に兵部少輔大伴家持作るこの三首の冒頭、短歌(1)に詠まれる「龍田山」については山本博氏『竜田越』に詳しい。「龍田山」という単独峰は見当らないが、現在の奈良県生駒郡三郷町立野の西方付近一帯を示すと考えられている。

この辺りを道筋とする龍田越は、大和から西方への往來の重要な交通路の一つであり、万葉集には次のような歌が見られる。

人もねのうらぶれをるに龍田山御馬近付かば忘らしなむか

(巻五・八七七)

これは、大宰帥大伴旅人送別の宴で詠まれた「書殿にて餞酒

する日の倭歌四首」の中の一詩である。書殿とは書院を示し、学問所と言われる。もちろん大宰府の場合は中国のそれと比べて小規模ではあるが、「多少の図書もあり、酒宴も行なえるような比較的小さい建築物」(小島憲之氏『萬葉以前——上代びとの表現』第八章 海東と西域)であった。前掲の歌は、そこで送別の宴が催された時に、山上憶良が大伴旅人に謹上したのである。憶良等の悲嘆とは裏腹に、大伴旅人にとって「龍田山」を越えることは、大宰府からの帰郷の喜びを確実にしたものと思われる。

また龍田を越える旅びにとっては、春の景が印象的であつたらしい。藤原宇合が西海道節度使として筑紫に赴く際の高橋虫麻呂の歌で、途上の「龍田山」の景が細やかに描写されている。

白雲の 龍田の山の 露霜に 色づく時に、うち越えて
旅行く君は……龍田道の 岡辺の道に 丹つつじの には
はむ時の 桜花 咲きなむ時に 山たづの 迎へ参み出む
君が来まさば (巻六・九七一)

さらに次の高橋虫麻呂歌集の歌では、龍田越えの春の景がそこに咲く桜花によって詠まれている。

白雲の 龍田の山の 滝の上の 小桜の嶺に 咲きをある
桜の花は 山高み 風しやまねば 春雨の 継ぎてし降れば
ほつ枝は 散り過ぎにけり 下枝に 残れる花は……

(巻九・一七四七)

(1)で家持が「見つつ越え来し桜花」と詠むことも、龍田山を越える間中家持の目に、桜花が映り続けていることを表す。そ

れだけ家持にとって、桜花と龍田は印象深く結びついていると考えられる。

当時、龍田を越えて大和を離れる旅びとが、大和を思う時にまず想起するのが「龍田山」であった。それゆえ短歌Ⅲの(1)で「龍田山」を越えた家持は、「我が帰るとに」と帰郷の時期を思い、家人への土産「つと」(2)に思いを至らせる歌を作ることになった。

また家持に限らず、(2)のように作者が旅びとである場合には、家に残される妻を意識して、「つと」が歌に詠み込まれる場合が多い。ところが、家持の見る女性性は、(3)に示す「江南の美女」、すなわち「愛しき妻」の姿だけであり、家持の妻が直接詠まれているわけではない³⁾。

旅の途上の歌で、その時に作者の目に映る女性性は、しばしば「誰が妻」と表現されている。

黒牛潟潮干の浦を紅の玉裳裾びき行くは誰が妻

(巻九・一六七二)

右は、大宝元年冬十月、持統・文武天皇が紀伊の国に行幸した際に詠まれた、十三首の歌の一つである。作者は黒牛潟で見た女官から、都に残す「我が妻」を想起する。異郷にあって女性を目にしたことが、家郷に残る妻の姿を喚び起こしたのであろう。

短歌(3)の場合も、家持の視界には「向つ峰の上」に立つ一人の女性の姿が入っている。この女性を「愛しき妻」と詠むことによって、家持の都に残す妻が暗に示されることになる。

「愛しき」は「吾が愛し妻」(古事記歌謡六〇)「愛しき子も

がも」(四一三四)「愛しき我が背子」(四一八九)等、作者の親愛の情を端的に示す語である。それゆえ「愛しき妻」は、井上通泰『萬葉集新考』の指摘するように、「結句タガハシキ妻とあるべきなり」と語順を換えたほうが意味を取る上では理解しやすい。してみると、「誰が愛しき妻」の場合「愛しき妻」の配偶者を「誰が」と問う形になり、家持が女性を目にしながら、その夫を想起している詠と解さなければならぬ。

しかしながら、家持にとってはあくまで「愛しき妻」であった。この場合、「向つ峰の上」に立つ女性が、誰の妻であるかは問題にはならない。「愛しき」を用いることによって「誰が妻」の中には、都に残す「我が妻」の姿が呼び込まれる。その結果「向つ峰の上」の女性には、誰かの妻であることが推測されながら、家持自身の妻の姿が重ねられていると言うことができる。

また短歌(1)(2)の題詞には、「独」の語が用いられている。(1)では、家郷大和の地が「龍田山」を詠むことで想起されており、(2)では「家づと」によって妻の姿が暗示されている。「独」の語は、当然在るべきはずの一方の不在から生ずる空しさによって用いられる(川口常孝「独」の世界)『萬葉歌人の美学と構造』「家持覚書」一一)。まさに(1)(2)での家持は、共にいるべき妻と離れ、難波に在ることで「独り」であった。

一方短歌(3)の場合、「独」の語は見られないものの、家持が「独り」ある状態に変わりはない。短歌(2)で伏せられていた女性性は、「誰が妻」としてではあるが、ここで具体性を帯びた現実の姿となってくる。妻と離れて在る孤独感、簡単に癒せる

わけではないだろう。むしろ家持は、この女性の姿に都に残す妻の姿を重ね合わせることで、郷愁を募らせていく。

短歌(3)で女性と共に取り上げられる「向つ峰の上」の花は、(1)の龍田山の桜花と相応する難波の桜花と考えられる。ちょうど短歌Ⅲの四日前には、難波の宮を描く長歌Ⅱが作られた。「八千種に 花咲きにほひ」(四三六〇)と詠まれる百花繚乱の景、またその第一反歌に見られる「桜花今盛りなり」(四三六一)の景は、桜花へと絞り込まれながら、伊藤博氏(「防人歌群」前掲論文)が述べられるように、難波の繁栄を描く讃美となる。

それに対して、同じ難波で作られた短歌Ⅲには、家持自身の家や妻への心情が主に描かれる。長歌Ⅱが家持の、いわゆる公の意識を表す詠と解されるならば、短歌Ⅲは私的な想いを綴った作と言うことができよう。その意味で、長歌Ⅱと短歌Ⅲはあたかも家持の表と裏の立場を浮き彫りにした体となっている。

三首からなる短歌Ⅲは、家持の他の長歌Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴの中に違和感無く収められているように見える。しかし、これらは家持自身の望郷の想いを主題とする作であることによって、兵部少輔という官人意識からは遠ざかった、家持自身の生の声を伝える作として位置付けることができる。

三

短歌Ⅲから一日おいた二月十九日には次の長歌Ⅳが詠まれている。

IV 防人が情と為り思ひを陳べて作る歌一首

大君の 命畏み 妻別れ 悲しくはあれど ますらをの
心ふり起こし 取り装ひ 門出をすれば たちねの 母
掻き撫で 若草の 妻取り付き 平らけく 我は斎はむ
ま幸くて 早帰り来と 真袖もち 涙を拭ひ むせひつつ
言どひすれば 群鳥の 出で立ちかてに とどこほりか
へり見しつつ いや遠に 国を来離れ いや高に 山を越
え過ぎ 葦が散る 難波に来居て 夕潮に 船を浮けすゑ
朝なぎに 船向け漕がむと さもらふと 我が居る時に
春霞 島廻に立ちて 鶴が音の 悲しく鳴けば はろはろ
に 家を思ひ出 負ひ征矢の そよと鳴るまで 嘆きつる
かも (巻二十・四三九八)

海原に霞たなびき鶴が音の悲しき宵は国返し思ほゆ

(同・四三九九)

家思ふと寐を寝ず居れば鶴が鳴く葦辺も見えず春の霞に

(同・四四〇〇)

右は十九日に兵部少輔大伴宿称家持作る

長歌Ⅳには、防人の気持ちに冒頭から綴られる。「ますらをの 心ふり起こし」て家を出発した防人ではあるが、心の内は「妻別れ 悲しくはあれど」と動揺し、その心の揺れは、さらに難波出発間際に至り、望郷の想いを込めた結句「嘆きつるかも」に収斂していく。そして続く短歌でも、「国返し思ほゆ」(四三九九)、「家思ふ」(四四〇〇)と、防人の心は常に家郷の方を振り返りながら、これから先に向かう心許なさ、海路に対する恐怖とを歌に託していく。長歌Ⅳとその反歌では、こうした行く手に対する漠然とした不安が、防人の周囲をおぼろに

する春霞の景によって絵画的に描写されている。

また家持は、暦と季節および節物との関係に、殊さら敏感な歌人であった。霞についても例外ではなく、そのことを示す歌として次のような一首がある。

(天平宝字元年十二月) 二十三日に、治部少輔大原今城が宅^{いへ}にして宴する歌一首

月詠めば未だ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか

(卷二十・四四九二)

なるほど十二月は冬であるが、この歌が詠まれた天平宝字元年は、十二月十九日が立春であった。家持は、そのことをおそらく承知の上で、「霞」をあくまでも春の景物として捉え、その「霞」によって「春立ちぬとか」と詠んでいるのであろう。ところが一方で、家持には霞に別の意味を込めて用いた歌がある。

A 春霞たなびく山のへなれば妹に逢はずて月ぞ経にける
(卷八・一四六四)

B あしひきの八峰の雉鳴き響む朝明の霞見れば悲しも
(卷十九・四一四九)

Aでは、霞によって家持の見遣る景が隠されている。天平十二年、一時恭仁へ都が遷された。当時内舍人であった家持も官人として恭仁京へ向かう。二句目の「山」はその時に、平城と恭仁を隔てる奈良山であり、家持が妻のいる家郷を見遣る時に遮る「山」となる。しかもそこには霞がたなびき、山と霞の双方が家持の視野を覆う。この場合、家持にとって霞は単に季節を示す景であるだけでなく、自分の見遣る方を遮る景として

意識的に位置付けられていると考えられる。

こうした霞を用いる歌は、Bに示すように卷十七以降一層顕著になる。Bの「あしひきの八峰の雉」について『萬葉代匠記』(初稿本)は、『毛詩』(小雅・小弁)を引用し、「雉の朝に鳴くはなほその雌を求む」と注する。「八峰」の雉であるがゆえに、家持はその姿を直接目にすることはできない。ただ、雌を求めて鳴く雄雉の声を聞く時、雄雉の声のあたりにたなびく霞を目にする。結句「悲しも」は唐突ではあるが、家持が妻を求める雄雉に共感を覚えて詠み込んだ句と思われる。

これらABに見られる詠作姿勢は、長歌IVの結びの部分につながっていく。「春霞 島廻に立ちて……負ひ征矢の そよと鳴るまで 嘆きつるかも」の中で、家持は「春霞」が「島廻に立」つという景を目にする。また続く短歌でも、「海原に霞たなびき」(四三九九)「葦辺も見えず春の霞に」(四四〇〇)の如く、「霞」が詠み込まれている。そうした時に何ゆえ、家持は「嘆きつるかも」(四三九八)や「国辺し思ほゆ」(四三九九)「家思ふ」(四四〇〇)という感情を抱くのであろうか。長歌IVとその反歌には、家持が視野に収める霞の中から聞こえてくる「鶴が音」が取り上げられている。この「鶴が音」を越中での家持は次のように詠んでいる。

港風寒く吹くらし奈良の江の妻呼び交し鶴多に鳴く

(卷十七・四〇一八)

四〇一八は、続く四〇一九「天離る鄙ともしるくここだくも 繁き恋かもなぐる日もなく」の起因をなす歌とされ(新潮日本古典集成『萬葉集五』)、殊に「妻呼び交し鶴多に鳴く」の句

が、四〇一九での望郷の想いを引き起こすと考えられている。

この例から知られるように、家持にとつて鶴の鳴き声は妻を呼ぶ声であつた。そこに、異郷にある旅びとが家郷に残る妻を想起して悲しむ姿と、鶴が妻を求めて鳴く様とを重ね合わせる家持の姿が窺える。

してみると、長歌Ⅳで春霞の中から聞こえてくるのも、妻を呼ぶ鶴の声と考えられよう。防人は別れ難い想いの中で家郷を離れ、ようやく難波に到着する。ところが防人等の旅はその後もさらに続き、家郷を離れたことで生ずる望郷の想いは、より一層強まっていくのである。

このように家郷を離れる防人と家族の様子は、前掲長歌Ⅰにもすでに詠まれていた。

Ⅰ天皇の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の国は 敵^{たて}まもる
おさへのきそと 聞こしをす 四方の国には……東男は
いで向かひ かへり見せず 勇みたる 猛き軍と ねぎ
たまひ まけのまにまに たらちねの 母が目離れて 若
草の 妻をもまかず……あり廻り 事し終らば つつまは
ず 帰り来ませと 斎瓮を 床辺に据ゑて 白梧の 袖折
り返し ぬば玉の 黒髪敷きて 長き日を 待ちかも恋ひ
む 愛しき妻らは
(巻二十・四三三)

この歌の前半「いで向かひ かへり見せず」の句では、東男すなわち防人の姿に目が向けられ、後半「あり廻り 事し終らば……ぬばたまの 黒髪敷きて 待ちかも恋ひむ」の句では、家郷に残る母と妻の姿が、それぞれ作者の目を通して描かれている。家持が防人の状況を傍らで眺め、第三人称の呼称を

用いて成した客観的な立場からの歌と考えられる。

長歌Ⅰ・Ⅳが、ともに家郷から離れて難波へ向かう防人の想いを綴ることに変わりはない。だが、長歌Ⅳの「鶴が音」が呼び起こすのは、家持自身の想いである。それが、防人の想いと次第に融和されていく。作者が家持でありながら、第一人称の呼称で全体が詠まれていくことは、あたかも防人その人が歌っているかと疑わせ、そこに作者家持と防人等との距離は認めがたい。

最初に掲げた表からも知られるように、短歌ⅰ、Ⅲ、長歌Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、昔年防人歌の間には、それぞれ諸国の防人歌が収められていた。ところが短歌Ⅲの後には防人歌が進上されておらず、一日の間を空けて長歌Ⅳが詠まれる。仮に時間上の間断があつたとしても、内容から二首のつながりは否定できない。同時に、そのことは二首の左注によって一層明確にされるであろう。

Ⅲ 右 三首二月 十七日 兵部少輔 大伴家持作之
Ⅳ 右 十九日 大伴宿祢家持作之
これに對して、他の長歌Ⅰ・Ⅴまでの左注では、月・日・官職名をすべて表記する。

Ⅰ	右	二月	八日	兵部少輔	大伴宿祢家持
ⅱ	右		九日		大伴宿祢家持作之
Ⅱ	右	二月	十三日	兵部少輔	大伴宿祢家持
Ⅴ		二月二十三日		兵部少輔	大伴宿祢家持

ともに、天平勝宝七歳の防人歌中の家持歌なのであるが、短歌ⅰと長歌Ⅳだけに「月」「官職名」の表記がなされていない

い。

このうち短歌ⅰの前には、その前日に防人の姿を第三人称的な姿勢で描く長歌Ⅰとその反歌が詠まれている。

ますらをの鞍とり負ひて出でて行けば別れを惜しみ嘆きけむ妻
(巻二十・四三三二)

鶏が鳴く東壮士の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み

(同・四三三三)

これは長歌Ⅰの反歌であるが、圈点部分によって明らかかなように、別れに臨む妻と防人の様子を、「嘆きけむ」「悲しくありけむ」と第三者の立場で表現する。さらに翌日に作られる短歌ⅰでも、「今替る新防人が船出する」(四三三五)、「防人の堀江漕ぎ出る伊豆手船」(四三三六)と、ある距離を持つて防人の姿を眺める点にかわりはない。こうしたことから短歌ⅰは、防人の出発を描く長歌Ⅰの反歌にも似る機能を果たす歌と解されている(「防人歌群」伊藤博氏前掲論文)。それゆえ、短歌ⅰの左注には「月」や「官職名」を繰り返す煩が避けられているのであろう。

長歌Ⅰと短歌ⅰの関係は、同じく防人歌の中に含まれる短歌Ⅲと長歌Ⅳに関しても予想される。前節で述べたように、家持は短歌Ⅲにおいて、長歌Ⅰ・Ⅱに見られる防人検校使の視点から離れ、異郷に在る一個人の望郷の念を綴っていた。しかも、この想いは長歌Ⅳの中で「家を思ひ出」「嘆きつるかも」と具体的な言葉で表現されていく。

さらにその時に昂じた望郷の念は、短歌Ⅲを生み出すにとどまらず、続いて長歌Ⅳの詠作を促す。長歌Ⅳは、短歌Ⅲと無関

係に、家持の個人的な想いを述べているのではなく、また防人への同情のみから詠まれているのでもない。一日前に作られた短歌Ⅲに顕著に認められる家持の望郷の念の昂まりが、続く長歌Ⅳで防人の立場に立とうとした時に、防人の気持ちと重ね合わされていくのである。

すでに、長歌Ⅰと短歌ⅰは異なる日付を有しながらも、連続した意識の下に作られてきた。二月十七日の短歌Ⅲと十九日の長歌Ⅳに生じた一日の空白は、家持が新たな作を詠ずるに要した時間と思われる。短歌Ⅲと長歌Ⅳの場合は、そうした時間上の間断を超えて、左注の表記にも示されるように、二組を一連の作として捉えることが可能なのではないか。

四

防人に関する家持歌は、二月二十二日の信濃国と二十三日の上野国の防人歌との後に、二月二十三日の長歌Ⅴが詠まれて終る。

V 防人が悲別の情を陳ぶる歌

(1) 大君の 任けのまにまに 島守に 我が立ち来れば はは
そ葉の 母の命は み裳の裾 摘み上げ掻き撫で ちちの
実の 父の命は 栲づのの 白ひげの上ゆ 涙垂り 嘆き
のたばく 鹿子じもの ただひとりして 朝戸出の 愛し
き我が子 あらたまの 年の緒長く 相見ずは 恋しくあ
るべし 今日だにも 言どひせむと 惜しみつつ 悲しび
ませば 若草の 妻も子ども をちこちに さはに囲み
居 春鳥の 声のさまよひ 白栲の 袖泣き濡らし たづ

さはり 別れかてにと 引き留め 慕ひしものを (2)大君
の 命畏み 玉梓の 道に出で立ち 岡の崎 い廻むるご
とに 万たび かへり見しつ つ はろはろに 別れし来れ
ば 思ふそら 安くもあらず 恋ふるそら 苦しきものを
うつせみの 世の人なれば たまきはる 命も知らず 海
原の 畏き道を 島伝ひ い漕ぎ渡りて あり廻り 我が
来るまでに 平けく 親はいまさね つつみなく 妻は待
たせと 住吉の 我が統め神に 幣奉り 祈り申して 朝
開き 我は漕ぎ出ぬと 家に告げこそ

(卷二十・四四〇八)

家人の斎へにかあらむ平けく船出はしぬと親に申さぬ

(同・四四〇九)

み空行く雲も使ひと人は言へど家づと遣らむたづき知らず
も (同・四四一〇)

島陰に我が船泊めて告げ遣らむ使ひをなみや恋ひつつ行か
む (同・四四一一)

二月の二十三日兵部少輔大伴宿称家持

ここに掲げる長歌Ⅴは一見して知られるように、他の長歌
Ⅰ・Ⅱ・Ⅳに比べ、句数が最も多い。しかも、他の歌が明確な
段落の区切りを持たずに詠まれているのに対し、長歌Ⅴは中間
の「白檣の 袖泣き濡らし たづさはり 別れかてにと 引き
留め 慕ひしものを」の後で二つに分けることができる。

前半には、防人と別れを惜しむ父母、妻子の様子が「涙垂り
嘆きのたばく」「白檣の 袖泣き濡らし」「引き留め 慕ひしも
のを」の句によって示される。また後半では、家郷から離れが

たく、しかも行く先の不安を抱きながら難波へ向かう防人の姿
が詠み込まれる。こうして長歌Ⅴは、あたかも二つの独立した
長歌が一つに統合された形を取っている。

実際、防人と家人の別れの場合に描かれるのが長歌Ⅰで
あった。また、家郷を振り返りながら難波へ向かう防人の動揺
は、長歌Ⅳに詠まれていた。そこから長歌Ⅴは、長歌Ⅰと長歌
Ⅳを時間の経過上齟齬しない形にまとめていると考えられる。

小野寛氏(「防人との出会―防人の心情を陳べる長歌三作―」
万葉夏期大学14「家持を考える」所収)もまた、こうした長歌Ⅴ
の形成について、長歌Ⅰ・Ⅱの詠作経験と共に、長歌Ⅳの影響
が大きいことを論ぜられている。

しかし長歌Ⅴの第二反歌には、防人が家を想起していること
を表す「家づと」が用いられている。この語は他の長歌Ⅰ・
Ⅱ・Ⅳの中には見られず、むしろ短歌Ⅲの(2)で「木屑」を「家
づとにせむ」と詠む姿勢に通ずる。前述してきた如く、長歌Ⅳ
の詠出には短歌Ⅲを切り離して考えることはできない。してみ
ると家持は、長歌Ⅳ以降作者の視点を変える契機となった短歌
Ⅲの内容を、長歌Ⅴ一首の中にすべて盛り込みながら、自身の
長歌に終止符を打ったと考えられる。

一方防人歌中の長歌Ⅳには、家持自身が以前に作った歌が下
敷きにされていると思われる。

春の野に霞たなびきうらかなしこの夕影にうぐひす鳴くも

(卷十九・四二九〇)

「霞」と「うぐひす」の鳴き声によって醸し出される「うら
かなし」という心情は、「霞」と「鶴が音」を取り合わせなが

ら望郷の想いを述べる長歌Ⅳ後半の様子に通ずると言えよう。⁽³⁾

従来家持の長歌に対する評価は芳しいものではなかった。しかし、こと長歌Ⅳに関しては「末段が殊におもしろく、情景の活躍するを覚える。」(豊田八十代『萬葉集総釈 卷二十』)「末尾に至つて春霞と鶴の声とを配して、防人の慟哭を描いたのは成功している。」(武田祐吉『増訂萬葉集全註釈』)と、肯定的な評価がなされてきた。長歌Ⅳにおいて、視覚的な「霞」と聴覚的な「鶴が音」は、一首の中で融合されて「うらかなし」き心情を浮き彫りにする。それが、諸注の高く評価するゆえんとなるのであろう。

また短歌Ⅲ自体の日付について、橋本達雄氏(「大伴家持と二十四節気」『万葉集の作品と歌風』)は、清明節との関連を指摘されている。左注に示される天平勝宝七歳(七五五)二月十七日が清明に当たることから、万物の成長が促される春たけなわの様子を桜花で捉え、新たな感興で三首の短歌を詠み続けたといった想定することもあながち否定することはできない。

しかしながら、その短歌Ⅲについては、天平勝宝七歳の八十四首の防人歌中に位置していることを忘れるわけにはいかない。家持自身の私的な心情は、歌人との別れが詠み上げられた防人歌に触発されることで、一首目から三首目へと一連の展開を示し、次の長歌Ⅳを生み出していると考えられる。

そして長歌Ⅳが成功した「霞」と「鶴が音」との取り合わせは、それまでの家持自身が、すでに獲得してきた表現によって支えられていた。それと同時に、異郷にある旅びととしての意識を、とりわけ短歌Ⅲによってより一層昂まらせていたがゆえ

の所産だと思われるのである。

注1

防人廃止は、大伴家が東国部民に寄せる親近感を有していたことを前提とし、わけても彼らが通過する国々の経済的窮状を軽減しようとした大伴旅人の願いであった。吉永登氏「防人の廃止と大伴家の人」(『万葉文学と歴史のあいだ』)は、その実現が家持に引き継がれていると考えられる。そして、万葉集巻二十の防人は、兵部少輔である家持が自身の立場を利用し、上官の兵部卿橘奈良麻呂に陳情する意図があったという示唆的な意見を述べられている。

2

岸俊男氏「防人考―東国と西国」(『日本古代政治史研究』)は、防人歌進上の記録から当時の防人交替の一端を明らかにされている。また井上光貞氏「大和国家の軍事的基礎」(『日本古代史の諸問題』所収)によると、防人の構成は、大化以前において天皇側近の警衛を担った親衛軍であり、東国地方出身の舍人であったという。さらに、直木孝次郎氏「防人と舍人―東国との関係をめぐって―」(『飛鳥奈良時代の研究』)によって、西海辺境警備の任務が東国の舍人等に命ぜられていたことが指摘されている。

一方、防人の制度を含め防人歌自体の考察から、万葉集に残される防人歌は、難波津での「うたげの場」で生まれた「集団的歌謡」であることを、吉野裕氏「防人歌の基礎構造」が明らかにしている。

3

短歌Ⅲの(3)は、花木と女性の取り合わされた歌と認められ、同様な趣向を持つ歌には、巻十九巻頭歌を挙げることができる。
春の苑紅にはふ桃の花下照る道にいで立つ娘子

(巻十九・四一三九)

この歌は『萬葉代匠記』(初稿本)が「桃の天々たる、灼々たる其の華 この子^こき^き帰^かぐ、其の室家に宜し」(『毛詩』周南・桃夭)を出典として指摘する。さらに、小島憲之氏「上代日本文学と中国文学」(中・第五章)「萬葉集と中国文学の交流」には、短歌(3)が共に魏の曹植「南国に佳人あり、容華桃李の若し」(『雜詩六首・其四』)、『文選』卷十九)と類似することを指摘される。これらのことから、曹植の影響を受ける巻十九巻頭歌の「桃花と女性」は短歌(3)の中で「桜花と女

性」の構図に置き換えられていると考えられる。

4 家持がとりわけ立春・立夏という季節の変わり目に敏感な歌人であることは、関守次男氏「家持の季節感と曆法意識」(山口大学文学会誌 昭和三九・九)、さらに新井栄蔵氏「万葉集季節観攷一漢語へ立春・和語へハルタツ」(『萬葉集研究』第五集所収)によって論ぜられている。

5 村瀬憲夫氏「大伴家持の「防人歌」(近畿大学文学部論集「文学・芸術・文化」二巻二号)は、防人歌中の家持長歌題詞に「追ひて……(四三三)」と記されるのは、家持が憶良の作品に付せられた題詞や歌の内容を踏まえることで、「防人の悲別」を意図的に作品化しようとした現われであると考えられている。さらに、防人歌構成の意欲から、巻十四「防人歌」部立追補が家持によって行なわれる可能性をも示唆しておられる。

6 巻十七以降、家持は自らの名を記す場合、題詞、左注にわたって「官職名プラス大伴宿祢家持」「大伴宿祢家持」とすることが当然ながら圧倒的に多い(阿蘇端枝氏「万葉集の四季分類―季節歌の誕生から巻八の形成まで―」『万葉和歌史論考』)。

ところが、万葉集巻十七以降には、「家持」とのみ記される題詞、左注があり(三九〇九・三九一〇左注、三九二七・三九二八題詞、四三〇二・四三〇三題詞、四四六五・四四六七左注)、それぞれ家持の私的な立場を反映していると考えられる。

また、官職名、カバネが記されない例が四例ある。

(イ)「右一首大伴家持」(四〇四八)「水海に至りて遊覧する時に、おのおのの懐を述べて作る歌」(四〇四六)中

(ロ)「右は留女に贈らむために、家婦に詠へらえて作る。女郎はすなはち大伴家持が妹」(四一九七・四一九八)

(ハ)「越中国守大伴家持 報贈歌四首」(四〇七五・四〇七九題詞)

(ニ)「右は、兵部少輔大伴家持、植ゑたる椿に属けて作る」(四四八二)

先の(イ)を含む万葉集巻十八の四〇三六・四〇五一の間には本文の乱れがあり、(イ)の場合も他の表記のような整合性を求めること

が難しい。次の(ロ)は、家持が家人に対して贈り物をした時に作った歌の左注で、家持の妹への私信と思われる。また(ハ)の歌は、先に詠まれた「越前の国の掾大伴池主が来贈する歌三首」(四〇七三・四〇七七)の返歌でありながら、家持の歌は一首多くなっている。

この歌は、新潮日本古典集成「萬葉集五」が注するようには、「四〇七六以下のまとめとして据えたことを示す」ものと考えられ、単に池主の歌に対する返歌としてだけ機能するのではなく、家持が自身の作品として意図的にまとめようとした意識が窺える。最後の(ニ)の前後には、大原今城の手元にあった資料と推察される歌があり、ここでカバネが記されないことにも、編纂姿勢の揺れを感じさせる。

これらの例があるものの、特に(イ)(ロ)が示すように、巻二十短歌IIIに見られるカバネ表記の無い左注も、私的な立場による「心覚え」的な作品であることが示唆されていると推測される。

7 四二九〇に詠まれる鶯の声について、芳賀紀雄氏「大伴家持―ほととぎすの詠をめぐって―」(和歌文学の世界II「論集万葉集」所収)は、家持のほととぎす詠の展開と、鶯の歌との交流から、「遙けし」という聴覚現象を詠む姿勢が、「かそけし」の表現へと進展し、四二九〇「この夕かげにうぐひす鳴くも」の表現にも影響を与えたことを論ぜられている。その過程から四二九〇「この夕かげにうぐひす鳴くも」の場合もまた、鶯の声は遠方より聞こえるものとして捉えるべきことを述べられている。

付記

稿を成すに当りまして、伊藤博先生、芳賀紀雄先生の御指導を賜りました。記して謝意を表します。

(筑波大学大学院 文芸・言語研究科 日本文学 修了)